アメリカザリガニを人気者にしない、これからの普及啓発活動

認定 NPO 法人 生態工房　　佐藤　方博

演者は水辺の環境教育活動におけるアメリカザリガニの扱われ方が、対策とは逆の方向に作用しているのではないかと懸念し、軌道修正の提案をした（佐藤 2018a,b)。本発表では、アメリカザリガニを題材にした普及啓発活動の問題点をおさらいし、今後の普及啓発活動のありかたを提言する。

１.アメリカザリガニが好きな人を増やしたい？

水辺の生物多様性をテーマにした観察会や展示イベントでアメリカザリガニを用いる際には、アメリカザリガニの侵略性について触れるのが定番だ。しかし本種を通して何を伝えたいのかが見えにくい事例がある。侵略性の解説をしながら、一方では大型容器に入れて釣り体験や手づかみ体験を通して親しんでいるような場合がそうだ。解説内容も、外来種としての情報よりも、生態や体の仕組みや、さまざまなトリビア的な話に力が入っている。こうした活動の結果、きっとアメリカザリガニを好きになるであろう。水辺で行いたい活動が、環境教育なのか情操教育なのか、整理した方がよいように思われる。

２.これからの普及啓発活動で行うべきこと

ひとつは生態系被害の周知である。アメリカザリガニ侵入前の植生が豊かな池と、侵入後の褐色の池を比較した有名な写真がある。それは決してどこか遠くで起こったことではなく、わたしたちの身近にある、植生の無い茶色い池がまさにそのひとつだ。アメリカザリガニが蔓延する前の写真や、過去の生物種リストを掘り起こし､すさまじい生態系被害について啓発していく必要がある。

もうひとつは、在来種に親しむことである。アメリカザリガニはもともと人気者だったのだろうか? 環境がよくない水域にも生息し、捕まえやすく、みんなが知っているという理由で題材に選び続けている悪循環をやめなければ、生きものへの知識や興味がアメリカザリガニへ偏っていく一方だ。水辺にいるテナガエビやフナなどの在来種に親しみ、さまざまな生きものがいることを知ってもらうことが大切だ。アメリカザリガニには詳しいが、身近な小魚の名前を知らないという現状を変えていくところから始めていきたい。

佐藤方博（2018a）防除のブレーキ？ アメリカザリガニに対する割り切れない思い．第十三回「外来魚情報交換会」発表要旨．琵琶湖を戻す会．http://biwako.eco.coocan.jp/exchange/2018/exchange18ol.html
佐藤方博（2018b）わかっているけどやめられない？ アメリカザリガニに対する割り切れぬ思い．ボテジャコ(22)75-76．水生生物保全協会．